

積雪前の乾田に水稻の種もみ

初冬じかまき普及狙う

積雪前の乾田に水稻の種もみを直接まいて越冬させる「初冬じかまき」を広く知ってもらおうと、岩手大農学部の下野裕之教授（作物学）らの研究グループが、生産手法をまとめたマニュアルを公開した。稲作農家の担い手不足が深刻化する中、冬に作業を分散することで、春の繁忙期の負担軽減につながることを期待される。

マニュアルは全186ページ。種子の準備や土壌管理など技術や注意点などを説明し、東北6県や北海道、新潟県での実証結果を紹介する。

初冬じかまきでは地域により10〜12月に

岩手大 下野教授らがマニュアル



完成したマニュアルを紹介する下野教授

春の繁忙期 負担軽減期待

種もみをまき、春に出芽させる。マニュアルには排水のよい水田を選び1〜3センチの深さにまくことや、種もみを鉄や殺菌剤でコーティングすることで出芽率が向上することなどを記した。

グループは2008年に初冬じかまきの研究を開始。18年に農林水産省のイノベーション創出強化研究推進事業に採択され、実用化に向けた技術開発を進めてきた。

22年には秋田を除く東北各県、北海道、新潟県の20の生産者が導入し、栽培面積は40秒まで広がった。春じかまきに比べ出芽率は低いものの、同程度の収量が見込まれ「東北以南では安定的に生産できるレベルになっている」という。

下野教授は「経営の安定化につながる新しい技術で、生産者の一つの選択肢となる。必要な時に使えるよう、広く知ってもらいたい」と話す。

マニュアルの要約版を下野教授が代表を務める「イネ初冬直播きの発展と普及を進める会」のウェブサイトで公開している。全文閲覧には「普及を進める会」への会員登録が必要。会費は無料。連絡先は下野教授019（621）6146。

(C)河北新報社

※河北新報 令和5年10月13日付

河北新報社提供の記事を掲載しています

※無断転載・複写を禁じます